

日米美術教育事情：

カリフォルニア州美術教育プログラムを元に

徳 雅美

カリフォルニア州立大学チーコ校

日本の状況米国の事情

インターネットの普及のおかげで、ここカリフォルニアの地においても、リアルタイムで日本の情報が手に入る。今日本における美術教育の行方が気になる。中学における美術教育は本当に選択制になってしまうのか。「ゆとり教育」への変換、「総合教育」の導入、それに伴う科目時間数削減から、とうとうこの日がきたかという感拭えない。今の日本の状況は米国の美術教育が存亡の危機にたたされた1960年代に良く似ている。当時の米国は教育改革に揺れ、そのあおりを受けた美術教育は他教科との競争において瀕死の状態にあり、存在をかけて理念の見直しを迫られていた。結局米国の美術教育がとった方向は、職業訓練的な技術教育でもなく観念的な感性の教育でもない、ディズプリン教育という形でその存続に活路を見出した。DBAE (Discipline-based Art Education) ¹⁾である。他の多くの理念と同様、このDBAEに関しても賛否両論はあったものの、1980年代から米国全土に普及し、現在も Comprehensive (Discipline-based) Art Education ²⁾と名を変えながら、米国ほとんどの州でスタンダードと融

合した基盤理念として現在も存続している。

2004年に発行されたナショナルスタンダード ³⁾の中心理念にもその影響が強く現れている。

現在かつての米国のように、存続の危機に立たされている日本の美術教育は、その理念をどこに置こうとしているのだろうか。他科目との関連において、明確なディズプリンを元に学年を通じて同方向性連続性を持つ科目にするのか、それとも従来のような美術教育しか成し得ない「感性の教育」としてのビジョンを押し通すことができるのか。それともこれらを融合した形にするのか。また段階的にその達成レベルを評価できる科目にできるのか。そもそも統一した理念を見いだせるのか。いずれにしろ日本の美術教育理念の方向性に拘わらず、他教科との競争において一定の授業時間を確保するためには、美術教育の意義目標を明確にそして有効に表明しえる教師自身のプレゼンテーション能力が問われることは間違いないだろう。さて現在の米国の美術教育はどうなっているのだろうか。

米国の教育、教員養成プログラムの今

NO Child Left Behind (NCLB) ⁴⁾ (落ちこぼれを出さない教育)は低迷する米国教育の実態に対応すべく提案された教育法令である。米国児童生徒の学力の底上げを目的とし、その方法のひとつとして教員養成プログラムの強化を推進している。児童生徒の教育レベルアップのためには、カリキュラムの改革だけでなく、教育に携わる側、つまり教員の質の向上を目標に掲げているのは、評価すべきことである。しかしその方法論に疑問の念を唱

える人は少なくない。テスト重視の教員養成プログラムに移行しているのが顕著だからである。例えば、カリフォルニア州において教員養成プログラム⁵⁾に入るためには、美術専科か否かに拘わらず美術教育は必須コースであった。が、2003年度から音楽か美術教育か何れかの選択必須となり、テスト⁶⁾にパスしさえすれば、教員養成プログラムへの入学が認められることになったのである。結果、美術関連の知識、経験がなくても小学校教諭においては美術を教えることが理論上可能となった。

カリフォルニア州立大学美術教育プログラム

日本において約10年毎、社会の状況、ニーズに反映して、授業要項が改訂され、カリキュラムも更新されるように、米国においても約10年毎にスタンダードが改訂されている。カリフォルニア州での最近の改訂は2004年で、現在大学の美術教育プログラムも内容更新を迫られている。前回1994年の改訂と比較すると今回の改訂には大きな変化がみられる。まずスタンダード領域として6番目に明確に美術教育理論、発達理論教育を設定したこと。そして昨今の傾向である芸術の定義拡大に伴って芸術範疇の呼び名が変わり、美術教育で扱う種類も拡大されたことがあげられる⁹⁾。今後ますます美術教育の扱うテーマ、種類が拡大されることはあっても減少することはないだろう。

さいごに米国においてヴィジュアルポップカルチャー（視覚大衆文化）を美術教育の中でどのように取り扱うかが話題になっている。

特にこの5年程の間に急速に知名度を得たテーマであるが、大衆文化またその関連アートを社会現象の鏡として認知し、そこに潜む社会問題を読み解いていこうとする批評鑑賞の形で取り入れられている場合が多い。美術教育がもの作りを通しての感性の教育から、視覚文化を通して社会を読み取る知覚教育を含めた教育へと美術教育の役割はますます多様化している。日本のマンガ、アニメが世界的に認知されて久しい。これらがこどもの美意識に知覚にどのように影響を与えるのか、また美術教育における可能性は。これらの問題をマンガ、アニメのオリジナル国である日本側から発信していくのは、ヴィジュアルポピュラーカルチャーが話題になっている今、とても有意義だと思う。日本から世界へ向けて語れることはとても多い。またそれを待っている美術教育家も多く存在するのである。

註1) DBAE はArt-making (造形), Aesthetics (美学), Art History (美術史), Criticism (批評) の4つの理念を根底に美術教育プログラム、カリキュラム作成を推進しているが、その具体的な内容は各地域の状況に合わせて判断するようという地域中心型の美術教育理念でもある。またこの4理念に加えて 1990年代からポストモダン思想の中心でもある Multiculturalism (多文化主義) を反映しての美術教育カリキュラム促進に特徴がある。

註2) 現在はDBAEという言葉を使わずに、この言葉で表現されることが多いが、基本的には同理念の美術教育プログラムである。Comprehension という言葉の示すように美術を通して、理解能力、総合判断能力、もしくは問題解決能力の促進としての美術教育を位置づけている。 <http://www.artseducation.org/dbae.html>

註3) 米国は各州が独立国ともいべき50の州の合州国であるので、各州が独自のスタンダード(目標要旨)をもとにフレームワーク(授業要項)を作成するという形で、国全体で統一されたスタンダードというものは従来存在していなかった。が、国全体のレベルアップを図るという形で初めて美術のナショナルスタンダードが1994年に提示。 <http://artsedge.kennedy-center.org/teach/standards.cfm>

註 4) 2001年ブッシュ大統領によって提案され、2002年1月に採決された教育法令 <http://www.ed.gov/nclb/landing.jhtml?src=pb>

註 5) カリフォルニア州における教員養成プログラムは他州と異なり、大学院レベルに属する。例えば美術教員になるためには、4年大の芸術学部に属する美術教育学士 (Bachelor of Art: Art Education Option) を修了後、教育学部が運営する Credential Program (教員養成プログラム) に入学し、各々の専門を超えて、教育一般の理論方法論を学び、1年間の実習期間を経てはじめて教師になる資格を得る。

右サイト参照。CCTC (California Commission on Teacher Credentialing): <http://www.ctc.ca.gov/>

註 6) CSET (California Subject Examinations for Teachers): <http://www.cset.nesinc.com/> この他に共通基礎テストであるCBEST (California Basic Educational Skills Test) : <http://www.cbest.nesinc.com/> を受ける必要がある。

註 7) カリフォルニア州スタンダード改訂比較

2004年度改訂スタンダード要旨 http://www.caea-arteducation.org/	
Domain 1. Artistic Perception Component (Elements of Art & Principles of Design) 領域1: 芸術構成要素 (線、形、色彩、空間構成、概念要素他)	
Domain 2. Creative Expression Component 領域1: 芸術関連素材 (二次元、三次元、メディアアート、他)	
Domain 3. Historical and Cultural Context Component 領域1: 芸術史、文化史、社会史	
Domain 4. Aesthetic Valuing Component 領域1: 芸術批評	
Domain 5. Connections, Relationships, and Applications 領域1: 芸術を通しての社会関係、他学科との関連	
Domain 6. History and Theories of Learning in Art 領域1: 美術教育史、美術教育理論、発達理論史等	
1994年度基本コース	2004年度基本コース
Art history (美術史)	2-dimensional art (二次元アート)
Crafts (工芸)	3-dimensional art (三次元アート)
Ceramics (陶芸)	New and emerging art (新アート)
Design (デザイン)	Media art (メディアアート)
Painting (絵画)	Art history (美術史)
Drawing (描画)	Art criticism (批評学)
	History and theories of learning in art (美術教育史、美術教育理論等)